

進路指導最前線

教師はなにをめざし、どう動いたのか？

1 職業研究

生徒に具体的な職業観を持たせる

土浦第一高校の取り組み

リーダーシップの養成

職場訪問を実施するにあたり、生徒に各コース別の実行委員会を組織させ、職場訪問前の企業研究、事前レポートと訪問後の感想をまとめた「事後レポート」を企画・編集させた。主体性を求める環境を作り、生徒の自主性を刺激した。

茨城県立

土浦第一高校

生徒に

事前・事後研究をさせる 職場訪問

職業の真の姿を見せる

得意科目から安易に学部・学科を選択する生徒に、職場訪問を経験させることにより、将来起きた「職業を見越したうえで」地に足がいた進路選択を期待した。特に人気が高い医療系において、現場の厳しさについての話を聞かせて、職業の真の姿に目を向けさせた。

生徒の気づきになるような訪問先を

生徒に訪問先企業を決めさせる「有名店」よりも「おもしろそう」だと感じる理由で、安易に訪問先を決めてしまいかねない生徒の興味を引きつける必要があるが、生徒が職業について考えるきっかけとなるような訪問先選びに配慮した。

茨城県立 土浦第一高校

明治30年創立。普通科、理数科を設置。10年度の生徒数は1097人。10年度入試から過去5年間で東京大現役合格者数の平均は24名。ほか主要な進学先は筑波大、早稲田大、東北大など。勉強だけでなく、生徒の自主運営による3日間「渡る文化祭」など、学校行事にも力を入れている。



電話を

切ると、飯山克則

先生は思わずため息をついた。それに気づいた中島博司先生が声をかけた。

「また、断られましたか？」

飯山先生はつなぎながら答えた。

「厳しいなあ……。特に金融系はダメですね。不景気でこの会社も余裕がないのかもかもしれませんね。」

平成10年の7月末、2年生の担任である飯山先生と中島先生は、11月に実施する生徒の職場訪問の企業探しに追われていた。職場訪問は、3年次の文理選択および将来を見据えた学部・学科選択をするための一助となるように設けられた恒例行事だ。

実施3か月前の8月20日ごろまでにはなんとか訪問先を確定したい、と2人は考えていた。同校では生徒の希望を調査して訪問先を振り分けたあと、グループごとに事前レポートをまとめる。事前レポートでは、生徒が訪問する職場について「どんな職種の人か働いているか」「どんな経営戦略がとられているか」「業界が抱えている問題」「業界の今後の展望」など、さまざまなテーマを研究し、訪問先への質問事項などもまとめられる。少し職場の様子を見るだけの取り組みで終わらせないためにも、事前レポートにはじっくり取り組ませたい。だから、3か月

前に訪問先を決めたいと考えていたのだ。

だが、いくら早く決めたくても、どんな職場でもいいというわけにはいかない。小中学校の社会科見学のようにつきうちりセットされたコースではなく、実際に社員が働いている現場を見せてくれ、生徒の質問にもできるだけその担当者が答えてくれるような職場でないと、高校生が自分の進路を考えきつかけにはならない。だが、飯山先生、中島先生の希望を受け入れてくれるような会社となるとなかなか見つからない。受け入れたくても数十人もの生徒が入るスベ

訪問コース別のグループには、それぞれ担当の教師がつくが、事前の研究などは、あくまで実行委員の生徒を中心に生徒主体で行われる。



土浦第一高校教諭
中島博司 Nakajima Hiroshi
地歴科担当
昭和34年滋賀県生まれ。平成7年度より母校である同校で教鞭を執る。生徒に対して決してとらないのがポリシー。



土浦第一高校教諭
飯山克則 Iiyama Katsunori
昭和35年茨城県生まれ。英語科担当。平成5年度より同校勤務。米国などへ「日本の高校生の職業観は希薄」といっ

「18社に達するには、まだほど遠い状況だった。なぜ、9コース18社が、2年生の総生徒数353人に対して学年担当教師は11名。一つのコースにつき教師2人の比率をつけると、ほかの学年から応援してもらっても9コースが限度だ。そして、せっかく職場の様子に触れるのなら、1日に2社は生徒に訪問させたい。」

「できるだけバラエティーに富んだ企業を選び、充実した訪問になるように神経を使いました（飯山先生）」

土浦第一高校

では基本的に一つの学年を1年から3年まで、同じ教師チームが担当する。飯山・中島両先生にとって、この学年は同校に赴任して2回目の2年生。したがって平成10年度の職場訪問は3年ぶり二度目だ。



教師は、なにをめざし、どう動いたのか？

生徒の気質を見ると、年々「おもしろそうなこと」に流される傾向があるようだ。だから、3年前の前回、生徒に対して実施した「訪問してみたい企業」のアンケート調査は、今回は行わなかった。「生徒からは、テレビ局とかテーマパークとか、アミューズメント・スポットのようなどころしか出てこなくて、時間をかけて集計してもほとんど意味がないんですよ」と中島先生は苦笑いする。

「確かに訪問先は僕らが決めます。だけど、そこから先は生徒の出番ですよ。僕らはなるべく口を出さないです」(飯山先生)

前回は初めての経験ということもあり、自分が一生懸命に動きすぎて、生徒たちの自主性を損ねてしまったという反省が、飯山先生にはあった。

2学期が

始まる。九つのコースと企業名が発表された。文系企業4コース、理系企業5コース。第一勧業銀行と住友商事、東京海上火災保険とKDDI、住友化学工業筑波研究所と国立環境研究所、NEC筑波研究所とNTTアクセス網研究所など、2社ずつの組み合わせ。

生徒に希望する訪問先を聞き、同時に実行委

11月12日、

いよいよ職場訪問の当日を迎えた。グループごとにバスに乗り込んで、それぞれの訪問先に出発する。

初めは遠足気分だった生徒の態度が一変するのは、職場に一歩足を踏み入れた瞬間だ。第3コースの委員長に抜てきされた男子生徒は、電通の社員が自分の仕事を生き生きと話すのを聞き、「本当に仕事が好きなんだなあ」とうらやましく思ったという。また、第7コースで国立環境研究所を訪

生徒には、できるだけその仕事内容がリアルに伝わる現場を見せてもらうようにした。住友商事では、プレゼンテーションルームを見学した。



員の立候補を募った第1次アンケートで、だんトツの人気だったのはJTBと電通の第3コース。定員に対して希望者は約2倍。「どつしてもこのコースに行ってみたかった」という男子生徒は、アンケート項目の「実行委員を希望しますか」の「はい」に丸をつけた。実行委員は、企業を訪問する前に作成する事前レポートと、訪問したあとに作成する事後レポートの編集責任を負う。

事前・事後レポートは、コースごとに全生徒が実行委員と話し合いながら執筆する。実行委員はまとめ役を務める中でリーダーシップを身につけていく。これも職場訪問の目的の一つだ。そもそも職場訪問が始まったのは平成元年度にさかのぼる。スタート当初から、生徒主体の運営を意図して生徒による実行委員会が組織された。

「実行委員を経験した生徒から、『学ぶことは多かったけれど、実行委員に負担がかかりすぎるから、次回は委員会は作らない方がいい』という声が出たそうです。しかし逆に、このような行事は生徒が成長する場、リーダー養成の場となりえるという可能性を秘めているんですよ」と飯山先生は語る。事実、この行事でリー

れた生徒は、「さまざまな問題を研究しているのを見て、近年注目されている環境問題が本当に深刻なテーマになっているんだと実感した」と事後レポートで報告している。住友商事を訪問した第1コースの女子生徒のレポートはユニークだ。「社員食堂には、同じ課の仲のよい友達と食べているらしい若い女性社員、熱心に仕事の話をしていると見受けられる中年の男性社員、1人で食べている社員、本当にいろんな人がいた。普段はあまり考えないことだけど、世の中にはいろんな年齢の、いろんな人がいるんだなと思った。それまで漠然としか想像できなかった「職場、仕事」がリアリティーを帯びてきたのだ。

一方、医療系を希望する生徒が多く参加した第5コースでは、職場訪問後、進路変更する生徒が少なくなかった。成績がいいから、収入がよさそうだからといった理由で医学部を希望していた生徒が医療現場を目の当たりにし、真剣に考え直したからだ。

「筑波記念病院では院長先生が毎回、医療の厳しい現実を話してくださるので助かります。生半可な気持ちで医療系に進んでも、おそらく途中で挫折してしまうでしょうから」(中島先生)

職場訪問の感想を

まとめた事後レポートが、12月下旬に各コースで製本された。事後レポートには、「進路考察上学び得たもの」「訪問先に関する感想」を中心に、事前レポートでの質

住友商事を見学した生徒たち。オフィスではパソコンは1人1台、インターネットも駆使して仕事に取り組む。働く人々の生の姿に触れることができた。



ダーシップを身につけた生徒は、文化祭、体育祭でも活躍した。

「教師はとりあえず生徒に『1』だけ提供しよう。それを『1』のまま受け止めるか『2』や『3』に発展させるかは生徒次第だ」ということが、この行事に対する僕らのスタンスなんです」(中島先生)

最終の訪問先希望調査を経て、それぞれの生徒の参加コースも決まった。各コースで6名から9名の実行委員が中心になって事前レポートの作成が進められていった。

問に対する訪問先からの回答、さらに職場訪問をきっかけに生徒たちが独自に調べた関連資料の抜粋などが掲載された。職場訪問に先立って予備知識を深め、問題点を整理し、実際に見てきたことをまとめ、発表する。数か月に渡る取り組みがようやく終わったのだ。

飯山先生と中島先生は、生徒たちが工夫を凝らしてデザインした事前レポート、事後レポートの表紙を見ながら今後の課題を語り合った。

「職場訪問は3年次の文理選択の指針としてほしい行事ですが、文系に行くか理系に行くか悩んでいる生徒からは文系企業、理系企業の両方を見たかったという声が多かったですね。地理的な関係で難しい面はありますけど、工夫して次回は文理ミックスコースを設定できればと思っています」(飯山先生)

「特定のコースに人気が集まりすぎました。企業の組み合わせをもっと少し考えればよかったと反省しています。3年前は人気があった金融系が今回は希望者が少なかったのを見て、こちらの予想以上に生徒は世情にピビッドに反応するのだということもわかりました」(中島先生) たった1日の職場訪問だが、生徒にいろんなきっかけを与えたのでは、と飯山先生は考える。

「進路選択に直接結びつかなかったとしても、僕らがやっていることが生徒にとって10年後、20年後のための種まきになればいいと考えています。1日だけの体験でも、ゼロと1では全然違う。将来、彼らが社会の中核を担ったときどこかでこの体験が役に立てばと思っています」

千葉県立 匝瑳高校

社会人の 体験談から仕事の 魅力を実感する

匝瑳高校の取り組み

1 将来について考えるきっかけを
大学受験のためだけでなく、
将来の希望や学びたい学問を
視野に入れて勉強に取り組ませた。
そのため、自分の将来について生徒に考えさせる
きっかけとして、社会人の話を
直接聞く機会を設けた。

2 事前に質問事項を送付
講師が話しやすいように
生徒の質問事項を簡潔書き添え、
事前に講師に送付した。
当日の講演の進め方などは講師の
やりやすい形を尊重、自由に
話してもらった。

3 文理選択の一助に
匝瑳高校では普通科は、
一年次の終わりに文理選択をする。
その前に、この取り組みを行うことで
文理の枠のない企業や職種が存在を知るなど、
生徒は幅広い視野を持つて前向きに
文理選択について考えることが出来る。

千葉県立 匝瑳高校

大正13年創立
平成10年度の生徒数は990名
ここ数年は、国立大では千葉大、茨城大、筑波大、
私立大では立教大、青山学院大、法政大に多く進学している。
普通科のほか、英語科、理数科も設置。陸上競技部、
弓道部、ソフトテニス部は全国レベルの実力。



「将来の 夢を生徒に持 たせ、働くことの楽し さ、やりがいを伝えたい のです」と語るのは、10 年度の「キャリアガイダ ンスセミナー」の中心的 役割を果たした酒井三憲 先生。「キャリアガイダ ンスセミナー」とは、10 年度から始まった、各企業の第一線で活躍して いる社会人に自分の仕事について語ってもらった 取り組みである。その目的は、1年生の生徒の 職業観を育成するため、仕事への理解を深め、 仕事の内容、働くことの意義、やりがい、喜び を知ってもらうことにある。

生徒は、社会や職業について想像以上に知識
を持っていないし、家庭での会話が少なくなっ
たのが、親の仕事の内容さえ知らないことも珍
しくない。金杉光明校長は語る。

『キャリアガイダンスセミナー』の目的は、
生徒に仕事とはなにかを知ってもらい、職業観
を育成することです。でも、もう一つねらいが
あるんです。それは、なぜ勉強するのかという
疑問の答えを生徒に見つけてもらうことです。
なぜ勉強するのか……。それも、ただ大学に
入るために勉強するという動機ではなくて、自
分は将来こいつの仕事をしたい、だからこの大
学に行くために勉強する、というような長期的
視野での動機があれば、勉強に取り組む意欲が
もつとわくはずだ。それは、自分が希望する「生

き方」を実現するための学習へとつながるだろ
う。そんな教師たちの思いが「キャリアガイダ
ンスセミナー」を支えている。

「キャリアガイダンス セミナー」 実施のき

きっかけは、平成9年5月にさかのぼる。酒井先
生は東京で行われた全国高等学校
進路指導研修会に出席した。そこ
では職業観育成のため職場見学な
どを行っている高校の事例を聞く
ことができた。研修会から帰って
きた酒井先生は進路指導部でその
内容を報告、同校でも職業観育成

進路指導部では、「キャリアガイ
ダンスセミナー」の実施
に向けて、何度も検討会を行った。
生徒に行うアンケートの内容につ
いても議論を重ねた。



千葉県立匝瑳高校校長
金杉光明 Kanasugi Mitsuki

千葉県高等学校教育研究会の
進路指導部会長の務める。
「進路指導は、生徒の生きがいを
育てる指導でなければならぬ」と
考えています。



千葉県立匝瑳高校教諭
久保雅一 Kubo Masachi

英語科担当
進路指導部は同校では4年目。
10のついでに3まで教え、
それ以上は生徒に考えさせる
指導をしていきたい。



千葉県立匝瑳高校教諭
酒井三憲 Sakai Mitsunori

国語科担当
同校では進路指導部は3年目。
「俳句からウルトラマンまで、
豊富な話題が酒井先生の
授業の特徴です」(久保先生談)

のための取り組みを行えないかと考えた。

「それ以前から、生徒の職業観育成が進路指
導において重要だとは認識していましたが、具
体的な取り組みには結びついていませんでした。
研修会はいきつかけになってくれました。ま
た、本校独自の3年間の進路指導の流れを定め
た『3か年計画』をちよつと見直そうかといっ
ときだったので、新しいことに取り組みやすい
状況でもありました」と語るのは、「キャリアガ
イダンスセミナー」に、準備段階からかわつ
ている進路指導部の久保雅一先生。
同校では「新3か年計画」を立てるにあつ

